

ている。

銘 苜 嘉 信 (四十五歳) 防衛隊分隊長

私の場合はですね、二十年の三月六日にですね、防衛隊に召集されてですね、石部隊の西林(中佐)大隊長の部隊の第五平井中隊の第三小隊のもとに召集されてですね、その防衛隊長は仲村(中尉)でした。

私はですね、部落出身の六名をつれてですね、既教育は私一人だったもんだから(在郷軍人)分隊長として入ったわけです。

それから、ぼつぼつ陣地壕を掘るとか、戦車壕を掘るとか、そんな仕事を屋當祖でやっていました。

四月六日に、いよいよ敵がきたんですよ。牧港の今のペプシコーラ会社の近くにきたんですよ。艦砲はきましたが、敵前からの弾はそんなに来ませんでした。それでですね、私は六名をつれて食糧をとりに行っただんですよ。城間の壕にですね。行ったら、急に敵の弾が激しくなって、危険だもんだから、みんなを先にやって、私は後になつたんですよ。早く逃げなさい、と言って。もしたらですね、早く帰ろうとした六名の中の一人が砲弾にやられてしまったんですよ。

その宮城カミィは、十分間ぐらひは生きていました。まだ生きているんだからね、放っておくわけにもいかず、自分一人では重たいので、私は銘苜カマィという人をつれて担ぎに行っただですよ、またあれがやられてですよ。破片で頭をはがれてももうて。気の弱い

て御飯をたいて待っていました。みんな死んで、もう帰ってこないよ、と私は報告したんですよ。私たちの怪我は看護兵が簡単に治療しました。それから屋當祖の自然壕の本部の方へ行っただですよ。西林中佐もいましたが、そこには負傷兵がたくさんいました。

それから二日か三日して、部隊長と副官は別れの盃をしていましたので、は、これはもうみんな死ぬつもりだと私は悟って、逃げたんですよ。逃げて行ったら、ちょうど仲西の学校の近くの自然壕に、防衛隊がみんな集まっています。防衛隊の主計少尉に指揮されてですね、握り飯を日に二個ずつくれています。その壕はすでに日中は馬乗りされているんですよ。だから私は主計少尉に言うたですよ。こんなに腹がへっつていては戦争はできないから、私が五名ほどつれて行って、キビ畑からサトウキビを取ってくるから、出してくれと頼んだんですよ。すると、危険だから、と断られました。大丈夫だからと強いておねがいして、私は五名をつれ出して、また逃げて行っただですよ。首里の末吉の方へです。首里ではあっちこち食糧を探して、行ったり来たりして、あとで試験場の側の宮平という家に十日間ぐらひ隠れていました。

その家には他の避難民も入っていました。そこでは、弾がとんで来て、城間の小湾ぐわのカマィという女の人が、腿の肉をせんぶとられてももうてですね。またその破片で、小湾ぐわのお父は胸をやられてですね、即死です。もしたら、小湾ぐわのカマィの夫は、まだ死なない妻をもう助からないからといって埋めようとしていましたが、みんながどんでん逃げて行くもんだから、そのままにして、小さい息子をつれて逃げたんですよ。あとで聞いたんですが、翌

人だから、あわてて、こわがって、心配してですね。お前は大丈夫だから心配するな、これは私がおんぶするから、と私は言うて。私は宮城カミィをおんぶして、屋當祖の壕につれて行っただですよ。そこには四中隊の軍医(少尉)が一人いたんですよ。それに治療させて貰ったが、腕の出血がひどくて、すぐ死にましたね。その死体を穴に埋めて始末してから、部隊に帰ったら、部隊長がみんなこれから第一線に行くから、お前たちも食事をしなさいとすすめていました。私は麦飯と味噌汁を食べました。

それからですね、みんな兵隊は急造爆雷を持っているもんだから、私は防衛隊で爆雷は使用できないと、拒否したんですよ。しかし、運ぶだけだから運べというので、持って行っただですよ、城間の裏の方へ。四月六日の夜ですよ。

作戦はいい作戦だったでしょうね。四中隊と五中隊は、反対の方から出てですね、われわれの中隊は後方から出て、挟み撃ちをする計画だったんですよ。ところが行ってみたら、なかなか敵は優秀だから、もう敵の砲弾がどんでん飛んで来て、進めなくて、防衛隊はついてこないんですよ。私ももう一人は、岩の陰にかくれて、様子うかがったら、日本軍は一発も撃たない前に、ほとんど死んでしまっているようでした。だから私たちは、谷底の方へ逃げたんですよ。逃げるときも、追撃砲がどんでんきて、大変でした。そのときに、私は右足のすねを破片でやられました。またもう一人は、耳をやられていました。

そうして浦添の壕に帰ったらですね、残っていた兵隊たちは、大きなシンメ鍋に、戦果をおさめて帰ってきたら食べさせようと思っ

日もとの所へ戻ってみたら、カマィは死んでいたそうです。

それから私たちはですね、五月の中旬だったでしょう、津嘉山に行っただですよ。その壕には球部隊がいて、ちょうど小隊長が出てきて、お前たちは何かと訊くんですよ。私たちは、防衛隊だが第一線の激戦地から追われてきましたから、一晩休ませて下さいと、お願いしたんですよ。そうか、われわれは今から第一線に行くつもりだが、敵はどんな弾を使用していたか、と戦況をたずねました。敵はだいたい迫撃砲ですがね、これからひどくなるかもしれないけれど、今のところその威力はないですよ、と私が答えましたら、ああそうかね、と中へ入ったきりもうずっと出て来ないんですよ。

そこで私たちは球部隊の壕から出てですね、津嘉山から東風平に行きました。島尻方面に行っただからは、壕がなくて、空家に一日いたりして、あっちこちに隠れてですね、防衛隊五名一緒でしたが、友軍に会うと友軍はすぐお前らは何かと訊くので、はい防衛隊です、逃亡か、いやわれわれは食糧と弾薬の運搬です、ああそうかごころうさん頑張ってくれよ、と言うていました。私たちの服装は、まだ防衛隊の服のままでした。

それから六月初旬に、真壁の部落に行きました。そこでは部落の人たちとも逢いました。そこで私は民間人の着物に着替えました。砲弾はどんでん飛んできました。朝鮮人の兵隊たちが撃たれて死ぬし、名城のアカータンメーが撃たれて、天皇陛下万歳して、死ぬんですよ。私たちは母屋にいて、前の家には、朝鮮人が三名いました。真壁には十日ぐらひいましたが、食糧にはそんなに困りませんでした。友軍と一緒にあって、馬をつぶしたりもしました。

それから、砲弾が激しいので、ここは大変だというわけで、みんな一緒に、糸州の部落に行きました。糸州では空家にいましたが、そこも弾が激しかったですね。星でした、区長さんの銘苅嘉徳さんも一緒にいたが、私が危ないから行くな、と言ったんですが弾が来なくなると出て行って、出て行って三十メートルも行かないうちに、やられてしまうて、キンタマをせんぶとられてなくなっていましたね。で、本人は手榴弾を持ってきてくれえと叫んでいました、誰も持っていないだったので、そのままにしていると、じきに死にました。その死体は、その屋敷内に、みんな穴を掘って葬ったんです。

そのあとからは、防衛隊はちりぢりばらばらになって、私は糸州の部落の前の蘇鉄の山に隠れていました。そこにいるとき、破片がとんできて、背の高さぐらいの蘇鉄に当ってその切れたやつが私の身体にぶちあたったんです。そしたら、蘇鉄の小さい粉が、顔一杯にくっついてしまうて、さわったら血だと思っただけ、あ、これはやられたな、と心配して、こすってみたらなんでもないので、ほっとしてあわてて這って逃げて行ったんです。

その翌日、名城ビーチの方へ逃げて行きましたが、その途中に、部落出身の銘苅エイキユウという防衛隊がいたんです。彼は死ぬ覚悟をしていたんです。畑の畦にキビを倒してその中に他の二人と一緒に隠れていて、のぞくと手榴弾を持っていました。自決するつもりだと判ったので、私は言ってやりました。お前は子供たちもいるのに、死ぬことはいつでもできるんだから、子供たちの顔を見てからでも死ぬるじゃないか、もしアメリカの奴がどうするか判らん

安里 牛位(四十九歳) 農業

私は伊祖のずっと東の方の古い墓に入っておったんだ。それからアワ村長が敵がきておるから、そこから早く逃げて行きなさいと叫んだんだ。そして私は、伊祖の東の兵隊の壕に入っておったんだ。それからアメリカがきたもんだから、普通の道を歩くど死ぬかと思っただけ、田んぼの道を歩いて大平の部落に行っただけ。そこにはシマ(部落)の防衛隊がたくさんいたんだ。

敵が伊集城まで来ているよと言ったら、今日は見おさめだというわけで、ゆうゆうと煙草をふいてから、私も少し休んでから、甥の区長は竹槍を持っていたがそれも一緒に、大平の前の方へ歩いて行ったら、村の知念徳利さんがきて、どこに行くのかと訊くもんだから、敵は伊集城にきていますよ、私たちは島尻に逃げて行くつもりですよ、と言ったら、ここは壕に入りなさいとすすめられ、そこに二日間泊りました。

その壕は、兵隊が掘ったらしく、機関銃を撃つ穴も作られてありましたが、みんなそこに落ちていて、私たちに蒲団を被せてくれたり、山羊を殺したと行って山羊の汁をもってきてくれたりして親切にしてくれました。そして二日目の夕方、飯を炊こうとしているとき、兵隊がきて、誰に断ってそこに入ったかと、非常に叱られ、私たちは驚いて、さあさあ出よう出ようとしたら、内間の方には炊事の壕が空いているからと兵隊が教えてくれて、私たち五名は内間に行きました。

知念三郎という同級生が内間にいて、彼は空手をするブシ(武

けれども、そのときになってから死んだ方がいいじゃないか。そう言っても、絶対にきかないんですよ。彼を出そうと思っただけ、私は二時間ぐらいそこにいましたが、言うてもきかないんですよ。小湾の宮城幸吉という人がね、女の人と一緒に入っていました。その二人はやつと出て、私と三人で逃げて行ったら、私たちはその翌日、捕虜になって助かったんです。

捕虜になったのは、六月の十九日でした。名城ビーチで、私たちがアダンの茂みの中で飯をたごうとしていたときに、アメリカ兵がきているんですよ。あわてて私は裸になって、手をあげたら、撃たずに許しよかったです。防衛隊の二、三人も一緒にいた。つかまったら、豊見城の伊良波につれて行かれました。そこでは、アメリカ兵と二世に、お前は防衛隊だろうと、くどく調べられました。私は防衛隊じゃなかったと頑張つて、四回目にやつとそうでないということになって、ハワイにやらされなかつたんです。なぜ頑張つたかというんですね、私は自分の子供たちは多分生きてるだろうと思っただけ、ハワイに行ったら二度と逢えないかもしれないと考え、防衛隊でなかつたというんです。

それから伊良波からトラックで運ばれて、具志川の前原というところに収容されました。むこうに行ったらね、私の子供は二人しか来ていませんでした。私には子供が六名いましたが、長女(二十歳)と三女(十二歳)しか生き残っていませんでした。娘たちの話では、亡くなった原因は、城間の壕にみんな隠れていて、毒ガスをうちこまれ、私の妻と子供たちは中で窒息死したそうです。生き残って収容所に来た娘たちも、しばらくは声がかれていて、不元気でした。

(士)でもあったが、壕の前に坐っていました。そこへ行ったら三郎さんが家からイモやおかずを持ってきて、腹ごしらえしなさいと、くれました。それから、内間の区長さんが、兵隊の炊事の壕につれて行ってくれました。

そこに行つてから、牧港の仲泊のおばあちや子供たちも一緒に呼んで、私が一斗罐のガンガラーにイモを炊いて上げたりしているうちに、そこへ首里から日本軍がきて、少尉とカシン(下臣)が、私から敵の様子を聞いて、こつちが一発撃つとあつちからだけ撃つてくるかわからないし、戦車を転がすための急造爆雷を持って行つても、放り投げて逃げてくるしかできないこと、それから火焰放射器が火をばあばあしてどこもかしこも焼いた後からアメリカ兵はついてくること、そんな話を私から聞いて、日本の兵隊たちはまた首里に帰りました。

その後、内間はどんどん激しくなつたもんだから、私たちはオマチエ(オマチエ)名護松尾へ行きました。いつも夜、歩きました。名護松尾に行ったら、私たちは浦添村のどこそこの誰だど名乗って、壕に入れて貰いましたが、泊の裏の水道タンクのある所は、砲弾で石粉が崩れてきて、そこは壕にもおれなくなつて、そこから内間に行きました。

内間に行つたら、西から来たものはスパイだから殺せという命令があつたということで、兵隊が私をおどしたので、私はハチャ(度胸のある人間)ですから、あなたがただけが沖繩のために戦っているか、私も沖繩のために命がけでしてきたんだ、兵隊の飛行場を作つたり避難壕を掘つたり、アメリカ兵がどこまで来ていることを友軍に伝えたりしてきたもんだ、私はとてもスパイじゃない

よ、大正三年にシベリヤ出兵で勲章も貰ったよ、と言ってやったよ、納得して、壕に入れてくれました。

国場では、つれていた次男(十五歳)が足の腿を破片でやられて、私も大きな土で足を打たれて一時は動けなくなっていました。水を飲んで過しましたが、怪我は心配するほどではありませんでした。そこでは、友軍の兵隊が沢山死んでしまいました。また死んでいる兵隊を眺めていたら、兵隊におかれてすな、私は次男をつれて島尻の南山城の大里に行きました。

そこからまた逃げて、新垣に行ったら、豚小屋の裏の木の穴に穴を掘って隠れておったです。その家は焼けて誰もおらなかつたが、危険を感じているとき、牧港の人があそこにも空いている壕があると教えてくれて、その壕に行ったら、壕の側には死体がいくつもありましたんだ。女の人も男の人も、兵隊も。

私はあのへんの道はどこも判りませんでした、夕方になって移動するときは、いつも私が先頭でした。それから、真壁に行くときに、中城出身の十八歳の娘が私たちについてきたので、坂の所でその親たちをしばらく待ってもこないで、戦争が終ったら親もとへつれて行くからと言いきかして、真壁につれて行きました。真壁には防衛隊が沢山いましたんだ。

アメリカの兵隊が、火焰放射器で、防衛隊に向かって火をばあばあして攻撃していたので、また私たちは新垣に戻って、壕に入ったら、防衛隊もそこへついてきて、アメリカも追ってきていました。

アメリカに包囲されてから、三日ぐらい経って、新垣の前に

ちゃんや子供をアメリカが拾ってきて、誰にも彼にも抱かして面倒みるように言いつけていました。私は次男をつれていたので、抱かされなかつたが……。

兼城からは、トラックで、金武村の古知屋につれて行かれました。そこでは、浦添村の伊祖の部落に、日本軍の米が墓の中にたくさん隠してあったのを知っていたので、私が炊事係にお願いしたんです。伊祖に米があるからあれを取ってきてみんなに配給して上げたらと、しかし越境できないということで断られました。またあそこでは、糸満の人たちが子供たちをわずかな金で買い取っていました。食糧が非常に少なくて、はじめの頃は大豆をませた握り飯一個の食事でした。昔はキビの肥やしにしていた海草や、桑の葉や、山にある草など、なんでも食べましたんだ。

あのころは、みんな小屋を作るために、山に木を切りに行ったが、土地の人は鋸をもっている、鋸一つ持っている人が七人ほどをつれて行って、木を切ったり運んだりさせていました。山原の人は、何も判らない人でも、みんな班長になっていて、那覇の駅長も木を切る仕事でこき使われていました。その上あのころは、避難民は泥棒扱いされていました。私は、どこそこの誰でそんなことはないぞと喧嘩したこともありましたんだ。私が雨に濡れて風邪ひいて寝ていたら、怠けていると引っぱられたときがあったが、那覇の駅長も巡查になっていましたので、どうか休ませて貰いました。それから後は、私は綱をなう仕事をさせて貰いました。いくら納めればよいときまっていたから、午前中に二十尋、午後二十尋ときまっていたが、自分の小屋でそれだけを一気に仕上

は、いい井戸があつてそこはアメリカが炊事に使っていて、おかずの匂いも非常にするので、そこに水を汲みにも行けず、壕の中では、那覇の二十二、三歳の女の人が、負傷はしてないがとも水を欲しがって、小便でもいいから飲ましてくれと頼むので、私が茶碗に小便を溜めて飲ましてやったら、元気になっていましたよ。

それから、アメリカの攻撃を受けて、防衛隊も避難民の女の人たちもみんな死んで、私と次男と十八歳の娘の三人だけが生き残っていました。三人は裏の山に逃げて、逃げながら、アメリカが棄てた罐詰の残りなどを食べましたんだ。

そして私たちは、新垣の山の中を通って、アメリカが焼いたキジ畑の中に隠れました。そして、そこには電線が張ってあって、それにつまずくと、すぐパラパラ攻撃するようにしてあつたが、私たちは用心したつもりだったが、敵の軍用犬に見つかってしまったんだ。そして、私は死んだふりしておけよ、と言ってあつたが、一緒に娘が起きて下さう起きて下さうというので、仕方なく私も起きて、手をあげて捕虜になりましたんだ。

それから、南山城に歩いてつれて行かれ、そこは死人を積んであるところだったので、もう殺されるものと思い、私は気を付けて首を斬られる覚悟をしていました。アメリカの二世がきて私の雑糞を調べて、中に入れてあつた勲章はアメリカが、断髪機械は二世が取上げました。

そこから、スンザ(潮平)・兼城に、トラックでつれていかれましたが、そこでは、逃げるものは片っぱしから機関銃で撃って殺しよつた。逃げるものは沢山おつたが……。それから、生き残りの赤

げて、あとは川へ魚や蟹を取りに行ったりしていました。

銘 苺 サツキ(二十八歳) 家事
銘 苺 スミ(サツキさんの又従姉)

壕は、親戚一緒にひとところがいいと思つて、みんなで二十三人一緒に部落の壕に入っていました。四月七日に、敵の砲弾が、壕の上におちました。そのとき、爆風がものすごく、入口に立ててあつた畳は全部倒れていました。畳が脇腹に強くぶちあたつて、しばらく動けなくなつていた人もいました。その人は戦後まで身体の調子が悪いということでした。

そこで、ここは危いということになって、夕方、弾がこなくなつてから、岩の下に四、五日隠れていました。

そのときからは、区長さん命令です、ね、戦がおし寄せてくるから、食糧はみんな自分たちの力で壕に運びなさい、という命令でしたからね、大きい家には米が沢山入っていましたから、それを壕に運びましたが、二、三日すると、夕食の準備をしているときに、隣の部落に敵がきているからみんな逃げないと大変だよという話が伝わってきたんだから、鍋もそのままにして、あわててみんな逃げましたんですよ。子供たちの手を引いて、少し荷物も持つて。

逃げましたら、伊祖の前の方に、おじさんたちがいて、その世話で、おじさんたちの大きな墓の隣に入れて貰いました。

(首里に行くまでを、スミさんが補足)

その仲間の墓には、十日間ぐらいいいたんですよ。あんまり激しく

なあって、こっちはもういられないねと思ってる晩にですね、沢
峯の方から石部隊の兵隊さんがですね、伊祖の方に斬込み隊として
行ったけれど、伊祖は全部もう敵に囲まれているから自分たちは行
っても駄目だからといって、前の河原からぬけてきたよと、みんな
全身びしゃびしゃに濡れてですね、うちなんかの墓の中にですね、
ちよっと灯りが見えよったからこっちにきたよと言って来ていまし
た。

一人は少尉一人は伍長、二人が墓の中に来たんですよ。親戚の叔
父さんは竹槍を準備してからに、前に坐っているもんですからね、
兵隊さんがですね、おじさんおじさん敵はもう伊祖の部落にきて明
日は馬乗りされるけれど、こっちにいたらどんなにするね、と言っ
たら、叔父さんは、うちはこの竹槍があるから目を突きとばしてや
るよと、こんなに(手真似)なされてですね。おじさんおじさん、
おじさんがそんなにするまでには敵が手榴弾一発でも撃ちこんだら
みんなそのままですよ、みんな一緒に沢峯の方に行った方がいいで
すよ、とおっしゃりよったんですよ。

その兵隊さんたちは斬込み隊の残りで、時計を見ながら、斬込み
の時間が終わったら、もう行かないで行ってきたと報告するつもりだ
といていました。伊祖へ行った斬込み隊はみんな死んだはずだと
もいっていました。うちなんかは、七十六歳のおばあさんが一緒に
でしたが、歩けないから行かないというて、家族は死んでも一緒に方
がいいからと断ったんです。斬込み隊は一時聞ぐらいいました。

その翌日は、昼中、たいへん爆撃されてですね。夕方六時頃です
ね、仕方なく墓を出ようということになって、叔父さんと叔母さん

向うに行ったら安全で戦争みたいじゃないから、と通りがけの兵隊
さんにいわれたんです。

それで四月下旬に、南風原から豊見城へ行ったらですね、親戚の
人がいらっしやったんですよ。晩に保栄茂という字につきましたら
ね、親戚の叔父さんがいい壕があるからと教えてくれたんですよ。
その壕はですね、晝部隊が作った壕だというて、そこは完全だから
そこに避難している間に戦は勝つからというてですね。そんなふう
に紹介されて、入ったんですが、翌日、山部隊の兵隊さんがきて、
ここはまたも晝部隊がきて使うから、あんたたちはむこう側の壕に
行きなさいと出されたんですよ。

それから、同じ部落の移った西側の壕には、四十日ぐらいいたん
ですよ。そこはとても安全で食糧もたくさんとれよったんですよ。
村の人も親切にしてくれて、好きなものから取って食べなさいと
いうし、お店をしているという小父さんが、戦争の情報も教えたり
してくれましたよ。最初はいつもいい話ばかり聞かされていまし
た。後では、一線部隊はどこそこまできているよ、首里城も駄目に
なったから、あんたたちももうここにはいられないね、と言われた
から、私たちがそこから出たんですよ。

六月のはじめに、豊見城から出てからは、壕もないし、行きど
ろもないんですよ。道もどこを歩いていいの判らないもんだ
から、避難民の行くところにただついて歩いてですね。なんという
部落だったか、砂糖を製造する家に一晚泊ってですね、そっちら
伊敷という部落へ行って、茅葺の家に入っていました。その家主の
おじいさんがですね、あんたたちがいると家を焼かれてしまいうか

は残してーその叔父さんたちは二人とも亡くなっていますー仲間
(字)の部落を通って、首里に行っただけです。

ところが、首里の墓も、すぐに激しくなあって、夜になるとすぐ側
まで敵の偵察隊がきているということでしたから、またそこから
逃げ出しました。前に警察の方がもし敵がきたらあんたたち家族は
首里の警察の壕にきなさいね、その壕は大丈夫だからと話していま
したから、それを頼りに行っただけです。それは首里の島堀の前の山
の壕でした。そこへ行ったら、大きな壕はいっぱいあって、あつ
ちはもう狭いからこっちの壕にいておきなさいね、と警察の方に紹
介されて、前の墓に、酒の入ったカミを外に出して、入りまし
た。

墓の中に二時間ぐらいいましたら、警察の方がきて、みんな島尻
に避難するから、早目に行っただ方がいいよ、ゆっくりゆっくり子供
たちも休ませながら、行けるから、とおっしゃったもんだから、私
たちも島尻の方へ行きました。首里から、夜の九時頃に出て、疲れ
て歩けないと泣く子供もいたんですが、南風原に行ったら、山部
隊の兵隊が出て行った跡の壕をですね、友軍の兵隊さんに紹介され
てですね、子供たちをつれて道を歩いている私たち避難民を見て可
哀そうに思っただけですね、この壕に入って休んでおきなさいといっ
たんですよ。その壕に入ったら、友軍の兵隊さんが使った鉄や鍋や
らがあっただけですからね、下の方の畑からイモを取ってきて、それ
を食べてそこに三日いたんですよ……。またそこから出なさい
と、中部に行く一線部隊の兵隊さんが控室に使うからと、命令され
たんです。そこを出たら、あんたたちは豊見城の方に行きなさい、

ら、他所へ行かないなら、戸棚の中に日本刀がたくさん隠してある
からそれでたつた断るよ、といわれたからですね、私たちと一緒に
いた宮古の男の人がそのおじいさんに標準語でですね、なんであん
たは戦争中に人の命より自分の家のことばかり考えるか、あんたこ
そ首を断ってやるぞとおどしたらですね、おじいさんは詫言いです
ね、あんたたちがいたい聞いてもいいと言っていました。そこには
三日間いました。あつちこっちに死人が出ていました。

私たちは、私と娘と主人の妹の三名と、スミさん親子(娘九歳)
一緒にでしたが、おばあさんと妹としゅうとめさんの三名とは、真壁
でまた一緒にになりました。

私たちは伊敷から出て真壁の部落の山羊小屋に隠れていました。
その天井裏には、食糧を探しにきていた防衛隊が入っていました。
その茅葺のおじいさんも、避難民がいたら爆撃されるから、
早く出なさい出なさいとうるさくぐらって、そしてそのおじいさん
は、タライやバケツやカメに水ぶっかし汲んでですね、家のまわり
に置いて、家が燃えたらそれで消すんだと、家の裏の高い所にい
て、家を見守っていました。六十四、五歳のおじいさんでしたが、
そのおじいさんは後で亡くなったそうです。戦後、あんなに意地の
悪いおじいさんだったが、元気にしておるかねと思って、人に尋ね
てみたら、家族もみんな亡くなったんですよ。

それから真壁の自然壕に四、五日入っていました。大雨になっ
て、壕の中に水が流れてきたもんだから、そこから福地に行きまし
た。福地では、空家に一晚泊りましたが、雨が降るように砲弾がど

んどん飛んできていました。夜中に、上里(字)に行ったら、そこはもう海でどこも行けないので、また福地に戻りました。雨が降って溜った道の水は、血で真っ赤でした。道ばたには、死人やら負傷者がごろごろしていて、助けてくれ助けてくれと叫んでいました。福地に一日いて、知念(村)が安全と聞いて、知念に行くつもりで歩いたんですけど、道が判らないのでただ歩いていたら、糸州・小波蔵コハツクラに出ていました。糸州の裏の山には、日本軍の野戦病院がありました。一高女や女子師範の生徒が看護婦として入っていました。それから小波蔵の山羊小屋の中にですね、私たちは五日ぐらいいてですね、迫撃砲が激しいもんだから食糧取りにも行けないですね、ほとんど閉じこもっていました。ヒージャー(山羊)を取りに行っただけですが、すぐ哨戒艇から弾が撃ちこまれてですね、みんな逃げてきて山羊小屋にですね、大人たちは子供たちを囲んで抱いてですね、丹前などを被ってじっとしていました。それでも破片がとんできて兄嫁の長女(六歳)は腹を怪我していました。

こっちは危いから、どうせ死ぬなら、ということ、みんな自分の部落に帰るつもりで出て、糸満に向ったんです。糸満についてから、山の上から友軍が弾を撃ってですね、私たちが敵の方へ向って行くからといって、私たちが攻撃してました。私たちが米軍の方に行かさないようにしていたんです。その頃は、小波蔵あたりには怪我した兵隊さんがたくさんいましたが、私たちが自分の部落に帰って死んだ方がいいと思っただけで帰って行くのを見てですね、あんなたちはなんで敵の方に行くのか、死ぬならみんな一緒に死んだ方がいいですよ、行かない方がいいよ、と止めていましたから、それで、

緒に軍艦の中に押し込まれて、砂辺の浜に行っただけで、そこからトラックで運ばれて、野嵩という所に一応収容されたんです。

野嵩には三か月ぐらいいました。私たちは女子供だけで、男がいなかったの、働き手がないということから、あんなたちは古知屋の方に行きなさいと言われてですね。私たちが、古知屋の開墾地に行きました。それからは、食糧も配給されて、不足の分は、海に行っただけで、藻なんか取ってきたり、山からチイパッパーなんか取ってきたりしてそんなものを食べていました。そこで、私の子供は栄養不良で亡くなりました。その死体は、約一間ぐらいの、穴を深く掘って、四、五人も重ねて投げ込んで、埋めていました。ほとんどの人たちが栄養失調で死んでいました。

銘 莉 幸 江(三十一歳) 家事

主人が昭和十九年の八月に召集されましたで、残された私たちは、家の前に立派な壕を掘ってありましたから、そこに入っていたものの、そこへ間もなく友軍が入ってきました。

その部隊は石部隊の徳田隊だったですね。徳田隊の三小隊で、ミノシマ軍曹という人もいました。二十名余りでした。その部隊が、うちの防空壕の横から、別の防空壕を掘ってしまったですね。私はうちの主人はいないし、こっちは絶対にどこにも行かないから、と念を押して言いましたらですね、はいいいですよと、返辞してくれましたから、安心してですね。

私たちの壕は東に向かって掘ってあるんですよ、友軍は南から掘

あとで撃ったんです。

糸満まで行ったら、糸満から向うには歩けないという話だったので、海岸に降りてみたらですね、そこには避難民がいっぱいしてましたんですよ。怪我した防衛隊やら兵隊もいました。水を汲んできて飲ましてくれと叫んでいる兵隊さんたちもいました。茶碗の一杯の水でもあんなたちが飲ましてくるんだしたら、あんなたちがいっまでも幸福になるよう祈るから、飲まして極楽させてくれ、と頼んでいる兵隊さんもいました。

それから私たちが、アダンの下に隠れているときにですね、三日目の夕方ですね、いまいつときは糸満の橋から通すということだから、みんな出て行った方がいいよ、と避難民の中の男の人がいいよってました。そこで、私たちはみんなと一緒に出て行ったんです。荷物も何もかも捨てて、出て行くときには、弾が雨のようにとんできました。弾にあたって、倒れる人もいました。兄嫁の四女は、浜で死んで、すでに蛆虫が湧いていましたから、すぐ浜に埋めました。

そして糸満に辿りついたら、いつの間にか捕虜になっていたんですよ。アメリカに見つけられて、捕虜になったんじゃないかなんですよ。糸満の湖平ウツシヤ(旧兼城村)という所に、たかさんの避難民が囲まれている所に、私たちは入って行っただけです。あの日は、六月十八日だったんですよ。その日にちだけは、よく覚えていて、私たちが、アメリカに殺されると思っただけで、泣いてばかりいました。

そして二十日には、水上戦車に乗せられ、それから水上戦車と一

つてですね、壕の中の壁が薄くなってですね。音が聞こえるので、私は心配して、兵隊さんの壕と一緒にいたら大変だと思っただけです。私は兵隊さんにそう言ったんです。すると、いいんですよ。お母さん、一緒になっても、こっちはどうせ兵隊が使うわけではないから、掘っておくだけだから、とおっしゃったもんだから、私はそうかと思っただけです。

それから、いよいよ明年になってですね、兵隊さんたちは、こっちは安全な所だから、どこにも行かないでいいよと、おっしゃいましたものね、部落の住民はみんな伊祖のコーラー会社(倉庫)の上の方へ行ってしまっているもんだから、私たちが心細くてですね。

ところが、壕を探しに出て行ってみたら、どこの壕も一杯で、どこも空いてないもんだから、仕方がなくてですね。お願いして、よその人の壕に、私が壕を探すまで、子供たちを置いてあったんですが、戻ってみたら、末の一歳になる子供があんまり泣いて、みんなから嫌われて早くつれて出てくれとおこられてですね。

それから、古い墓ぐわを見つけて、中から厨子がめを、しゅうとめさんと一緒に出してですね。いい壕を探すまではここに入れておこうねといって、子供たちを入れてですね。そして森川という部落に自然壕があるということを聞いたもんだから、私はお母さんと一緒に森川に行ってみたくて、そこも人が一杯で、入れなくて、戻ってきてみたら、もう空襲が激しくなってますね、ぜんぜん歩けない。こうなったら私たちは死ぬんじゃないかねお母さんと言っただけです。よその石垣の横に隠れていたら、その人がこっちは

らっしゃいと呼んでくれてですね、助かったんです。また、夕ご飯もいただいたんです。

それから、命がけで、子供たちのいる古い墓ぐわに帰ってきて、何も食べないで、一日泊って、空いている壕を見つけたんです。家から食糧や荷物を運んだんですが、その間、砲弾が激しくてですね。壕の中に誰かが置いてあったクバ笠なんかパラパラになっていました。そこに一日いて、こわくてもう、そこにはおれないから、自分の家の防空壕がいいだろうと思って、夜のうちに引返して帰ってきました。

帰ってきたら、壕の中には、よその小母さんたちが入っているんです。仕方がないから、ここは私たちの壕だから、出て下さいと言ったんです。その人たちは、はいと言ってすぐ出て下さってね、そしてもういよいよ敵が上陸してきたという話を聞いてですね。私は心配して、ご飯も喉に通らないくらいだったんですよ。

そしたら、祖母やしゅうとめさんに、何も心配することはないよと、慰められてですね、何も死んではいないのに、と言われてですね、すぐピンとくるのは主人のことですよ。

それでも自分の子供のためですから、水汲みに行ったりね、薪取りに行ったりしてね。水汲みに行ったらとき見たんですが、伊祖の人が、腹を破片でやられたらしく、内臓がぜんぶ出てしまっていて、ちゃんと曲がる曲がるしたものがまるく地面に置かれたようになって、その人はまだ生きていて坐っていました。その人は六十過ぎの小父さんでしたが、後で聞いたら、仕方なく生きてたまま埋めたそうです。埋めた人たちは、遠い親戚の人たちだったそうですが、その人

たちも後で死んだそうです。

私たちは、こわくなって、井戸には水を汲みに行かないで、前の小川から水を汲んで飲んでいました。私たちの壕は、すでに友軍の壕と通じていましたから、徳田隊長（中尉）がきて、こっちは必ず米軍がくるから、北部へ行きなさいよと、おっしゃっていました。そしたら一緒にきた少尉がね、いやこの壕はぜったい安全だから、山原へ行ったらかえって大変ですよ、子供たちが可哀そうですね、とおっしゃってね。だけど隊長はね、いや私の命令に従いなさい、と念を押して、出て行かれたんです。私たちは、はいそうしますと言って、お握りも作って、準備してあったんですけれどね、祖母（八十三歳）さんと、主人のお母さんが、私たちは歩ききれないから、行かないでくれと頼むんです。だけど私は、お母さんたちは、卵も油味噌もたくさん作ってあるからね、あがって下さいね、子供たちのためには仕方がないから行きましょうね、と言ってね。それで、じゃあもう仕方がないから行きなさいとおっしゃってね。ところが今度は、うちの長男も次男もせったい山原へは行かないと言いついてね。けっきょく、じゃあもう仕方がないから行かないでおこうということになって、その壕にいたんです。

そしたら、いよいよ敵があがってきたんですよ。その壕には、機関銃撃つところがあって、四角い穴があいていたんです。そこには最初は兵隊さんはいなかったんですよ。昼でした。その穴ぐわから覗いたら、悠悠とアメリカ兵が背嚢をして歩いているのが見えたんです。そしてその夜ね、友軍が入ってきたんです。その壕の入口には、中にあつた米俵を沢山積んでね、友軍は銃を構えているんで

と言ったんです。

そしたら、歩哨に立っていた山本伍長が、私の声を覚えていてですね、ああ小母さんですか、どうぞ、と小声で近寄ってきて、小母さんたちなら入って下さい、というわけで、神様に助けられる思いでそこに入ったんです。

そこには、住民が二十名ほど、兵隊さんが二十名余り入っていました。今の浦添の婦人会長さんの田中藤子さんも、早川中尉さんも入っていました。早川中尉さんは、私の側にいましたから、その言葉までもはつきり覚えてます。それから小池上等兵さんもいらっしやると、山本伍長さんが、小隊はみんな亡くなって自分たち三名しか生き残っていないよと、説明していました。

壕の中は、灯りもなく、真ッ暗闇で、手ぎぐりして入ったんですけど、そしたら早川中尉さんがいうにはね、お宅には何か燃やすものはないですかと、訊かれて、はいありますよ、と言ったら、じゃ取ってきて下さいませんか、はい取ってきましょうねということになってですね。私が出て行くことしたら、その子をここに置いて行きなさい、というんですよ。私はわあわあ泣く末の子供をおんぶしてましたから、で、いいえ、私はこの子はよく泣くからおいては行けません、と言いましたらね、大丈夫ですよ置いて行きなさいとしきりにすすめるんです。いいえこの子を置いては絶対に行けませんと私が反対したらね、じゃいかないで、というんですよ。

それから、あんたたちは危険だから中の方へおいでと言ってね、奥の方に入れられたわけです。長女（五歳）と三男（末っ子一歳）は奥の方に入れたら、末っ子がしょっちゅう泣いてですね。また長

す。米軍がきたらすぐ撃つと言って。そしたら、翌日の昼、アメリカ兵がこっちは見ないでぞろぞろと素通りして行って、その後、友軍は私に、こっちから出ないと大変ですよと言うんです。ですけど、私は、ここにいってもいいという約束だから出ませんよと、頑張っていたんです。兵隊さんたちは、後から入ってくる兵隊さんの様子から判ったんですが、逃げて入ってくるんですね。そこは逃げて集合する場所になっていたはずですよ。兵隊さんたちは、私たちに、はやく出て行きなさい、出て行きなさいと、追いたてるもんですから、私たちは仕方なく出たんです。

行く先は、別の友軍の壕でした。まだ戦が来ない前のことですよ。まだ私の家に兵隊さんたちがいる頃、兵隊さんが話していたんですよ。自分たちの壕は、食糧も沢山あって、非常に嚴重にされて安全だから、もしそっちにいられなくなったら、どうぞいらっしやいねと、話していました。食べものは、何も持たないで、来ていいんですよ、と言われていたんですよ。私たちは、用心して、長男も次男もおばあさんも、みんな荷物を分担して、食糧も持って行ったんです。イモクズや大豆を炒ったものや砂糖や米など、どこからそんな力が出るかと自分でも不思議なくらいでした。私は子供もおんぶして、大きな荷物を持って、みんな伊祖のその壕に行ったらですね、兵隊さんから最初は、先になつていたおばあさんは、誰の命令で入るかと、おこられたんです。うちのおばあさんは六十三歳で非常に丈夫な人でしたから、兵隊さんがこっちには入れないと言っているよカマーと、叫んでいました。私の沖繩名前はカマーといっていたんです。私は、それじゃあ別の壕に行きましよう

女は風邪をひいて喘息を起したりしていましたから、私はなんとかして上げないといかんと思っていますね。私は便器と小刀と鏝節はずつと持っていましたから、便器に小便をしてですね、それで濡らした布で長女の胸をシッパしてやりました。そのシッパをしているときですね、泣いていた末ッ子が急に泣きやんだんですね。なんだか急に泣かなくなったもんだから、私はすぐ不審に思ったんです。

そして私は手探りして、泣くと大変よ、と言いながら、抱こうとしたらね、その子は喉のところを一すびくびくさせて、急にぐったりなあって動かないんですね。なんだかこの子は変ですよ、とみんなに言ってから、名前を何度も呼ぶんだけど、泣きも返事もしないんですよ。藤子さん、うちの子供はどうしたんですかね、返辞もしないが……と言ってからすぐ、そこにいる誰かが殺したんじゃないかと思えました。うちの子供を誰が殺したんですかと、私はもう怒っていますね。私が大声で怒鳴ったら、勘弁して下さい、誰が殺したか判らないし、もう仕方がないことだから、と早川中尉さんが言うんですよ。やっぱり殺したんだね、と私が大声を出したら、早川中尉さんは、勘弁して下さい、その子があんまり泣くもんだから、誰がやったか判らないんだから、と言っていました。首を締められたのか、急に死んでいきました。

それで私が気が狂ったみたいにあんまり叫んだもんだから、早川中尉さんは怒っていますね、あんたも知っているでしょう、ここに四十名余りもいるのに、その子一人のためにみんな死んでもいいですか、とたしなめられてね、私は。山本伍長さんは、大変心配してね、あんなに賢い子だったのにね小母さん、誰がやったのかね、と

ら、それから壕に戻ったんです。

壕に戻ったら、入口の方で早川中尉さんがいにはね、この入口を見せなかつたかと何度も訊くんです。小池上等兵がやられてしまったと言っても、ちっとも心配しないで、入口を見せなかつたかというもんだから、私は、とうに出る行くときに見られていますよ、と言っていました。もう、こわくなかつたですよ。

嘘ではなく、すでにその壕は、馬乗りされていたはずですよ。そんな感じでした。アメリカに知られているというわけで、兵隊さんたちは、その夜、急いで準備して、出て行ったんですよ。夜中に、兵隊さんたちが出て行ってから、私たちも出て行くかと思って支度しているときに、沖繩の兵隊さんが駆けこんできました。敵がいるんですか、と訊いたら、はいと最初は返辞をしてから、いやどうもないよ、とその兵隊さんは言っていました。それで私たち残った二十名ほどは、思い切って出て行ったんです。雨が降っていました。

まる三日間飲まず食わずで、四日目にわたわけですが、外は雨が降りはじめたので、私たちは道の水溜りから、水を手ですくって飲んだんです。うちのおばあさんはね、しゅうとめさんが手を引いて、私は長女をおんぶして、次男の手を引いて、長男は一人歩きしていました。主人のお母さんは、ソコヒで眼があまりよく見えなかつた上に、壕の中で兵隊さんに間違つて胸を蹴られて痛いといっていました。みんなから遅れて後になっていきました。私たちが歩いていけると、パンパン音がして、私たちは敵の弾の中を逃げてですね、やっとう軍の弾薬壕に入ってどうやら助かつたんです。ただね、主人のお母さんは、どうなつたか、それっきり判りません。そ

言っていました（確かに殺しているんですよ最初から計画してたんじゃないなかつたかね、と後で思いました）。

坊やの死体は、入口の近くに置いて、手を合わせました。また水一滴もその壕の中にはないんですよ。水がないから、何も食べられないんです。明日まで、みんな我慢しておけよ、とみんな言い合つて、翌日になったら、早川中尉さんはね、私と藤子さんと小池上等兵にね、水を汲んでこいと命令するんですよ。あんなたちの子供さんたちにも分けて上げるからという条件でね、私たちが行くことになったんです。自分の子供にも飲ましてくれるのなら行きますよ、とね。

私は一斗罐、小池上等兵は水筒十個ぐらい、藤子さんは一升壺二本を持ってね、夕方になってから出て行つたんです。出て行く前の、早川中尉さんの注意ではね、女は絶対に殺さないから、もし敵に見つかつて追われたら、この壕の入口は見せないようにして、一応は別の壕に入つてからまた来なさい、という命令だったんです。はいそうしますと、私たちが出て行つたらね、暗がりでも、何かカサカサ音がするんです。何か物音がするから、一寸坐りましようかと私が言つて、藤子さんと坐つたら、すぐ一発、音がして、小池上等兵がやられてしまつたんです。ちようどね、小池上等兵は私たちが一メートルぐらいしか離れてないんですよ。パンと一発音がして、小池上等兵が倒れたもんだから、私たちはびっくりして大急ぎで逃げたんです。その後で、バラバラバラと銃の音がしていました。藤子さんはどうするところわがっていましたけれど、一応私たちは少し離れたところまで行つて、しばらくそこにいてか

この壕に入るまでには、みんなばらばらになっていました。

その翌日、まだ日が暮れない頃に、足音もなくなんの物音もしないうちに、急に何か爆弾をその壕の入口に投げ込まれてしまつたんです。多分催涙弾でしょう。パンという音がして、煙がもうもうと出てきたもんだから、すぐ私たちは、大変だと思つて、そこを出たんです。そしたら、むこうから銃をかついだアメリカさんがくるんです。すけどね、撃とうともしないんです。長男は心配してあっち行きこっち行きしてからに、私は声がかれるくらいに呼んで、やっとう掴まえて歩いていました。おばあさんはね、しゅうとめさんの帯に手を入れて、後からついて来ていました。そのときアメリカさんが指笛を吹いていました。それでもゆっくりゆっくり歩いていけると、八十三歳になるおばあさんは、もう歩けなくなつて、仕方がないもんだから、しゅうとめさんが離したんです。私たちは親子だけで、首里の方へ行くかと思つて歩いていました。私たちが通る間、そのへんは弾がこなくなつていました。伊祖の前の方には、友軍がたくさん倒れて死んでいました。その近くでは、アメリカさんが何か作業をしている様子でしたので、私たちは見つかつたら撃たれると思つて、その坂に伏せて、這つて進んで、棚原という屋敷の壕に入つたんです。その後、しゅうとめさんもおばあさんもそこへやつて来ました。そこでは、最初に、大きな貝殻に溜っている腐った水をみんな飲んで飲みました。それから、おばあさんは、親もとの家の豚小屋にお米があつたと話していましたから、しゅうとめさんが行つて、お米を取つてきてくれました。また、親當祖校長先生の家の裏に友軍の壕があつて、そこにはカンメンボが隠されてあると、どこで聞

いたのか、うちの長男が話したら、おばあさんは必ずとってきて頂戴というんですね。私は長女（五歳）がどこにも行かないでと、せがんで離そうとしないんです。前に、自分の弟が死んでいるもんだから、もうこわがっているんです。でも、あんまりおばあさんが頼むもんだから、またしゅうとめさんが取りに行ったんですが、カメンポはなかつたと戻ってきました。

棚原という屋敷の壕の中には、壺などがあって、味噌やタビオカのクズなどがあつたんです。だけど、マッチがなくなっていたもんだから、お米は水につけて、ふくらませた生米を食べていました。砲弾はあちこちに落ちていましたが、私たちの壕には、あたりませんでした。近くの、前銘所という家の方から、アメリカさんの食器を洗う音がしていました。私たちは、その壕には何週間も入っていました。私たちから外れたおばあさんは、あとで判ったんですけど、自分の家の壕に向っているうちに、その日に、アメリカさんに捕られてしまったそうなんです。

アメリカさんが捕虜をとりにきたときは、もう五月の末頃になっていたと思うんです。そのときは、隣の壕の人たちが、わアわア泣いているのが聞こえて、すぐ泣き止んでしまつてね。弾の音はしませんでしたが、もう死んだかもしれない私たちは思っていました。そして次は私たちの番だと思って、私は壕の中にあつた鉄で子供たちを散髪させてやり、シラミもとつてやつて、上等の着物に着替えさせていました。子供たち三名と、祖母さんと、しゅうとめさんと私の六名でしたが、いよいよアメリカさんが来るんだなあと待っていましたら、あんのじょう、私たちの前に来たんですよ。長

真似して、歩いて行ってしまったんです。

私たちは、橋を渡って、戦車の多い所まで歩いて行きました。もう殺されなれと思つていました。伊祖のはずれまで来てみたら、防衛隊がアメリカの青いシャツを着て、何人も瓦など集めたりして作業していたんです。そのうち捕虜になっている防衛隊の一人が、空罐に水を持ってきて、水を飲ませてくれてから、こんなことを話していました。アメリカ人はご飯も食べさせてくれて助けるんですよ、と安心させてくれたもんだから、私はほっとして、じゃあ助けるんだったら、前の壕に鍋とお米と釜を置いてきたんだが取りに行かせてくれますか、と訊いたらね、はい一緒に行きましようということになって、私はアメリカ兵と防衛隊と一緒に行って、荷物を持ってきたんです。それから、トラックに乗せられて、途中で捕虜をのせたりしながら、牧港につれて行かれ、その後、大山に移されました。

牧港についたときに、沖縄出身のペルー帰りの班長がですね、私たちのお米を取り上げて、おばあさんたちは軽蔑的にひどく当りちらすもんだから、おばあさんたちはこわがっていました。そこへアメリカさんがきて、その班長を逆に叱って、そんなに手荒く引っぱったりするな、とたしなめていました。

牧港では、どういうわけか私は残されて、おばあさんと娘（長女）は大山につれて行つたんです。班長の奥さんがいうには、もう親子はめいめい別々になるといふもんだから、私はもう一生逢えないと思ひ、泣きあかしたんです。二世さんがきて、ご飯の支度をして下さい、というもんだから、私はもう炊事なんかしたくない、と

女がこわがってね、それでもせんぜん口をきかないんです。声を出さなよ、と言いきかしてあつたら、ほんとうに声が出なくなつていったんですね。

そしたら、おばあさんが、「え、カマー。アメリカカーがカマーカマーしているよ」と言うもんだから、私はもしや友軍が来ているのかね、と思つて、外に出てみたくです。そしたら友軍じゃなくて、やはりアメリカさんがいるんです。私はアメリカさんにすぐ見られてから、引込んで、「おばあ、友軍じゃないよ、アメリカカーだよ」と小さい声で言つたんです。アメリカさんは、二人でした。アメリカさんだと判つたら、次男はわアわ泣き出してですね。私はもうどうなつてもいいと思つてね、子供たちを引張り出したんです。そしたらアメリカさんは、「カマン、カマン」してですね。そのときは、カマーと呼んだんじやないと判つたんですが、壕の前に坐れと合図するんです。

おばあさんがいうにはね、いわれる通りに窪んだ所に坐ろうとおつしやつたんですけどね。いえこつちがいいんですよ、あつちは水が溜まるから、死ぬならこつちがいいですよ、と私が反対して、みんな壕の上の平坦に坐つたんです。アメリカさんは、煙草を出してね、私とおばあさんに吸いなさいとすすめていました。私は受け取らなかつたんですが、おばあさんは貰つて持っていました。それからアメリカさんは、長女を抱きあげたもんだから、私は驚いてすぐ取り返したんです。こんどは、立ちなさいというもんだから、もう覚悟して、いわれる通り立つたんです。ところが、アメリカさんは、次男を可愛い可愛いして頭をなでてから、ついてくるように手

言つたんです。どうしてですか、と訊くもんだから、ああおばあさんと娘と別れ別れになつてもう逢えないから、悲しくて、生きる甲斐がありません、と答えたんです。二世さんは、いいえそうではないんですよ、車が足りなかつたから別々になつただけで、すぐ一緒にになれるんですよ、なんにも心配しないで下さい、と言って、私を納得させてくれました。私は気持をとりなおして、ご飯も炊いたんです。

ところが夕飯をちょうど炊いた頃に、トラックがきて、大山に行きなさいと言われ、夕飯も食べないでそのまま大山につれて行かれました。牧港もそうでしたが、大山もテント小屋でした。大山に行つたら、うちの娘がね、おにぎりを食べないで持つて、私がくるのを待っていたんです。泣きあって、抱きあってですね。そのとき娘は、ずつと口がきけなくなつていたのに、やつとお母さんと言えたんです。そこには四日間いましたが、食事は一人におにぎり一個ずつ日に二回ありました。

それから越来（村）の安慶田（あけだ）の前に收容されました。そこには、浦添村の人たちだけでも、テントが三棟ありました。一つに四十名余り泊っていました。私たちが着いた日の夜、私たちの上の方のテントで、みんなの見える前で、城間出身の三十三歳の女の人が、七名の白人兵に、強姦されたそうです。みんなこわがって、私たちのテントにきて、そのことを話していました。その女の人は、抵抗しなかつたので、怪我しないですんだそうです。その翌日からは、MPがきて、みんなを守ってくれていました。そこには、約一年ほどいました。私は軍の作業に行つて、アメリカ兵たちの洗濯をして

いました。いつも私は、こわがっていました。アメリカさんにいろいろと話掛けられてですね、私は、主人と一緒にいるよ、子供もいるよ、とわざと子供を仕事場につれてきて見せていました。それから私は、そこで働けば、給料が貰えると思っていましたが、帳簿にサインもしていたのに、なんにもなくただ働きでした。
主人は、大山の方で、亡くなったらしいと聞いていましたが、信じられませんでした。だから、防衛隊が捕虜になってくるたびに、訊ねたんです。そして、私の主人は、恩納岳で、わからなくなっているんです。主人はいつも先頭になって、軍服のままでした。ですが、今日までとうとう死体も見つかりません。

浦添村(村役所)

星 雅彦

時 一九六九年九月二十四日
場所 村役所 会議室

| | | | |
|----|-------|-----|--|
| 氏名 | 知念 明 | 現住所 | |
| | 宮城 篤三 | | |
| | 喜名 祥介 | | |
| | 安和 良盛 | | |
| | 比嘉 正育 | | |

解説

安和氏と喜名氏の体験談は、今日からすると当然ながら特異なものにちがいないが、多くの沖縄戦の体験者の中におくと、一種の典型的なものに思われた。

しかし本人たちにすれば、必死の逃避行であったわけで、激しい戦火の中にいたことには変りなく、そしてその淡淡とした表現の中に微妙な個性が見出される。また、それ以上の特異な体験も同様ではあるが、そこには当時の住民の心があり、さらに沖縄人気質が秘められていると思う。そういう意味と、他と比較し参考できる意味も考え合わせて、あえてここに掲載したのである。

知念明氏はハワイ生まれで、二十一歳までハワイにいて、古里に

定住して五年目に沖縄戦を体験している。それより以前に、九歳のとき沖縄に初めてきて数年滞在し、小学校に通っている。過去の沖縄も熟知している。そうした生い立ちが、沖縄戦でのその行動をほとんど決定的なものにしていたといえるだろう。知念氏は当時四月下旬に捕虜になった後、米軍側の宣撫班となっているのだ。つまり壕の中の避難民を説得し、救い出す役目にまわっているのである。その立場の変化、対米への意識、救出作業への苦心のほどが容易に想像できると思う。

それから宮城篤三氏は、敗残兵同様、いつも北部の山中を彷徨していたのだ。北部の山脈の頂上から一本の首里に至る道がむかしからあったということも、話だけでなく宮城氏の体験から、おおよそ確認されたようなものである。それよりも原始人のような生活体験が充分に想像されるのである。ただ、おしむらくは断片的で、表現力が不足していた。そこに執筆の苦心もあった。しかし、山中での生活のほとんどを、フーチバー(ヨモギ)、チイッパー、ンジャナ、カンダバー、山イチゴ等を食べて、親子八人が移動して行ったという事実は、強烈である。

最後に、浦添村の村役所の職員として、この座談会の、細心な世話役を買って出た比嘉正育氏は、沖縄戦の体験者ではないが、短いながら戦後の廃墟となった村の様子を話されたので、参考までに附記しておいた。

安和良盛(五十三歳) 県議

私の当山の部落はですね、やっぱり浦添城址の下側になっていま